
とある弟の奔走日記

理樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある弟の奔走日記

【Nコード】

N7306D

【作者名】

理樹

【あらすじ】

レベル5の超能力者御坂美琴の弟が上条当麻が巻き込まれるトラブルに巻き込まれたりしながら精神を削り減らしつつも頑張る本編再構成もの外伝と本編を交互に書いていきます

第1話：日常風景（前書き）

一応プロローグにもあたるキャラ紹介物
つたない文章ですが読んでいただければ幸いです。

第1話：日常風景

「クソッ、風紀委員に見つかった」

そんな叫び声が遠くから聞こえる。

ここは人口二百三十万人を抱えるほぼ学生だけで構成された学園都市である。

ただここは特殊な場所で普段のカリキュラムの中に超能力者の開発と育成といったことが為されており、普通の場所と比較して二、三十年ほど科学が進歩しているのである。

超能力などの過ぎた力は当然犯罪にも繋がりやすい。

採掘用のダイナマイトが犯罪や戦争で使われるようにだ。

当然、学生で大多数を占めているために通常の警備員の他に風紀委員が存在する。

普通の学校であれば素行の注意など簡単なものであるが、超能力とといった特別な力には同じく特別な力で対抗するために力の強い超能力で構成されているのである。

なお自主参加のため風紀委員の皆は正義感に燃えているはずなのだが：

「止まりなさい銀行強盗！これ以上、人を巻き込まないでくださいます」

少女の叫び。

一組の少年少女が三人の覆面野郎を追っかける。中学生が青年男子を追うのはあまりにシュールな光景だ。

「バカヤロウ！止まればって言われて止まれるかよ」

覆面の熱い主張に思わず少年はうなずきそうになったが、とっさに少女の方を見て考え直し妥協案を提示した。

「なら止まなくてもいいんで物を壊さないで下さい」

バキッ！

走っている少年に向かって並走していた少女が思いつき殴る。

「いってえ〜！」

「ふざけないで！犯人を取り逃してどうするのですか」

「いや、どうせ捕まえられるなら始末書の少ない方がマシだろ。ただでさえ別件で始末書の枚数がトップなのに」

少女は若手警官のごとく正義感に燃えまくっていたが、少年は老年警官のごとくその後を考え倦怠感を抱えていた。

「このまま追うのも面倒だから先行って足止めしといてくれ」

「そうね、人通りも減ったみたいですし」

パシュッ！！

少女が目の前から消えて一瞬あとに強盗犯の前に現れる。

「げっ、テレポーターか」

「風紀委員の白井黒子です。大人しく捕まりなさい」

そう言われて大人しくするはずもなく一人が素手で殴りかかってきた。

瞬間的に相手の横に移動して顎に向かって掌底を放つ。

さらに相手ごと移動して無理矢理、体勢を崩して地面に叩き付ける。体重の軽い黒子でも頭から叩き付ければダメージはあるが気絶させるといったことまではいかない。

地面に叩き付けられたことに一瞬呆けたが「ガキが、頭にのるなよ」と顔を歪めて起き上がろうとする。

「あら、それはあなたの方ではなくて」

いつの間にか指先に挟んだヘアピンを相手の服を地面に縫い付けるように移動させていた。

それを見ていた二人だったが気を取り直して筋肉質な男が威圧する。

「甘い、そいつはレベル0の無能力者だがおれはレベル3の強能力者だ」

素晴らしいながら体が段々硬くなっていき、目に見えて筋肉の肥大化がわかってくる。元がボディビルダーのような体型だったのに更に大きくなる。映画「ハルク」に出てくるような雰囲気だ。しかし

ながら映画で最強な存在でもこの土地では名声無き存在。

「たかがレベル3が何言ってるんですの」

呆れた様子で黒子が告げる。

「俺を馬鹿につ：「ウルサイ黒子、レベル3でも巧くやればレベル5にも届くんだよ」：何っ！」

明らかに離れていた少年がいつの間にか背後にいた。

後ろを振り向きながら、巨体に見合わぬ常人には不可能な速さで拳を振り抜く。

しかし、少年の速さは軽く跳ぶという、明らかに不自然な動きで相手の頭より高い位置に行く。少年が高くその拳を飛び越えながら相手の頭を逆立ち状態で掴んだ。

「揺れろ」

その一言の後に掴んでいた手が高速で震え、そのまま相手は倒れていった。

黒子に捕らえている男はその一部始終を観察して思考する。

「一人で振動能力と・・・なんだあれ、空間制御か？」と不自然な動きにあたりを付けた。

あまりに派手な能力で無ければ見抜きにくい事を知っている。

「凄いですわね、普通わからないものなのですけど」とそれを理解している黒子は犯人に対して正当な評価を与えた。

「あいつを評価するのは嫌いなんですけど、学園都市二百三〇万人に一人の複数能力保持者。^{コンプレックス}複数の御坂煉です」

普段の行いからか、仲間には正当な評価を与えがらなかった。

本当は彼の実の姉が関係しているのだがそれは別の話。

元々人間の脳の構造上、本来あり得ないはずの複数能力保持。レベル5より貴重な存在とされ能力の強さに関わらず危険視されている。そんな存在を相手に戦える訳がない。そう考えて残りの一人は仲間を見捨てて見惚れるくらい素晴らしい速さで逃げ出した。

そんな逃亡犯を見送りながら、「凄いよお、黒子。さっきの二倍くらい速いよ」などと立派なコメントを残してハイになっている煉。能力も使わずに速度を上げた姿に感動と尊敬を抱いているらしい。当然ながらそんな煉と比較するのがおこがましいくらい、真面目な風紀委員である黒子がそれを許すわけが無い。

「逃してどうするんですか！早く追い掛けなさっ：やばい女の子が人質にされそうになっているですよ」

「おい、これが見えないのか」と人質にナイフを突きつけ余裕を取り戻している犯人。実に悪党らしい行動を取っているがおもいつきり負けフラグである。

風紀委員のような正義感の強い能力者は人質を考えて発動を控えると思ったのだろう。

「本来だ！悪党らしい定番行動になんか懂れるね。………つて何か見覚えのある人質なんですけど？始末書が増えそうな予感がビンビンなんですけど」

犯人も考えていなかっただろう。突きつけた相手が風紀委員よりも性質の悪いものだということを……

人質を取り精神的優位に立ったと思い込んでる犯人はその発言に理解できない。

そのためか自分の優位を確認するために「お前、何言ってるんだ。これが見えないのかよ」と刃物をアピールする。

「アツタマキタ。朝はあいつに出会うし、今はこんなの捕まるし……」

人質から物騒な気配が漂う。なおかつ周辺の電気機器が変な音を立て始め、髪も逆立っている。

ついには本人からも変な音が鳴り、白い放電現象が起こっている。「人質さん、僕らが解決しますんで余計な行動をとらないで貰えますか。始末書が増えるんで……おーい、聞こえていますかー」

「ほんつとにふざけんな」
バリバリッ！

ガンッ、バキンッ、ドンッ！

それは本人の怒りを周囲に解き放ったもの。多少の指向性として犯人に向いていたものの周辺機器にあたえる影響は尋常ではない。

さらにここは学園都市という最先端技術で出来た都市なのでその被害額も計り知れなり・・・

「御坂あ！！また始末書かてめえは。本当に成長しねえな」

風紀委員は学生で構成されているはずなのにあきらかに年齢詐称をしている先輩が煉の目の前でしかっている。横であきれて見ている黒子と比較するとあきらかに歳の離れた親子くらい：

「いや、でも、オレの責任じゃないですよね？」

姉の責任ですよ、と小さい声で付け加えておく。

「いくら犯人逮捕とはいえ周りのものは無料じゃねえんだぞ」

いやだから今回は出来るだけ被害を減らす努力をしましたよ、てか壊したの俺じゃ無いですし、と必死に訴えてみるが受け取られない。ならばと頼みの綱と相棒である黒子をみる。

「煉くんが劇的に壊滅させましたわよ」

其処にはニツコリと笑顔で嘘吹く同性愛好者がいた。

「姉さん、次回からは出来るだけ周辺被害を減らして貰えますか」

数時間にも及ぶ仲間からの責任追求という尋問を受け、心も身体も疲れきった煉は何度目かになる注意を取調べ室の前で待っていた姉に言う。

「無理よ、そもそも被害者は労るべきでしょ」

「くっ、過剰防衛って言葉知ってます？」

青筋を浮かべながら小学生でも知っているようなことを姉に尋ねる。学園都市の名門お嬢様学校、常盤台中学のエースとまで言われている人がわからないはずが無い。

レベル5といった一人で中隊一個分より強いというものは多少の手加減をしなければ、チンピラが何人集まっても相手にならないのである。

「当たり前じゃない。馬鹿にする気なの」と自分の実力をまったく考えにいけないで煉を叱る美琴。期待してた答えとは遠く違っていた。

本来ならプライドが高くレベル0なんか相手にならないと見下しているはずであるため実力差は重々理解しているはずである。

それを理解しての発言であるため、さすがに弟としては許せない。

「なら弟を労って下さい！姉さんが物を壊すたびに始末書を出してんの僕なんですよ。今では風紀委員で歴代枚数が一位なんですよ」さすがにまずいと思ったのか「うっ、次回から気を付けるわ」などと言って顔を背ける。本当に理解してくれているのだろうか？

「本当ですか。当麻さんにも迷惑かけないようにしてくださいね」

上条当麻、今回の犯人と同じレベル0であるちょっと不幸な高校生であり、煉と同じ位御坂美琴という姉から被害をこうむっている。そのせいか奇妙な友情が生まれ、煉とは現在友達以上親友未満といった間柄。あと一步で彼女になれるらしい。まあ、同性愛者では無いので当分はこの関係だろう。

ちなみに口癖は「不幸だあゝゝゝ」で最近姉をどうにかしてくれと言われてたりする。

「あっ、それは無理」

「何故です？」

「レベル0のあいつが抵抗するのが悪いと思わない？」と非常に自分勝手な自論を述べる。常盤台中学のお嬢様としては何とも言えない回答である。つーか本当にお嬢様か、この姉は？

「欠片も思いません！」

ジャイアンか、などと心の中で思ったりしてみたがちょっと怖いので言えない。かなり怒っている煉だが怖いから顔色には出せないの

である。逃走犯に言ったレベル5にも届くといったのは奇を狙った瞬間にしか通用しない。真正面から勝てると思ったなら大間違いなのである。総じてプライドの高いレベル5に真正面からあのセリフを言ったら殺される可能性だって出てくるのである。

一歩間違えれば死亡フラグ。あの時は躁状態であつたためテンションに任せて言ってみたがレベル4くらいに抑えていったほうが良かったかも、と改めて思っていた。

イマジンブレイカー

レベル0だが幻想殺しという神様の力であろうと打ち消すといったちよつと変わった右腕を持つ当麻さんは並みの攻撃じゃびくともしない。ちなみにこの事は当麻さんには「姉に内緒にしてほしい」と言われてたりする。理由は知られると本気で死ぬかもしれないからだ。

そのため決着は常にムキになった姉が本気を出すということになっている。

「いつも最終的には姉さんがカミナリとか、レールガンとか、大技使って物を壊すじゃないですか！」

当麻さんの右手の力は知られていないから当然こんな技は通用しないのである。ただ、他の何かが確実に壊れる。前はカミナリで停電になった。始末書もなぜか煉が出した。理不尽な一方通行の連帯責任である。

まあ、長々と姉に怒っていたのでさすがに疲れてきていた。

犯人追跡⇒何故か説教を受ける⇒姉を怒るといった長い作業であつたために疲労はだんだんと蓄積されていったのである。主に精神面のほうにきているのだが……

「お姉さまあ~~~~~」

さつき自分を売った相棒にして同性愛者であり、姉の後輩でもある白井黒子がやってきた。こっちは常盤台中学の中でも言葉遣いから生粋のお嬢様だ。なにか手に抱えているらしい。缶ジュースだろうか？その走ってきた勢いで姉に飛びついている。

「くっ、黒子お」などと公共物を壊してもケロッとしている姉だが性別に関しての感性はまともであるため苦手になっているようだ。

「どしたの、黒子」

「いや〜、お姉さまがお疲れになっっていると思ひまして缶ジュースを買ってきたですよ」と両手に抱えたジュースの一本を渡す。当然もう一本は自分用である。

この白井黒子、相棒なのは姉との繋がりをより強固にするためであり、弟である僕は死ぬほど嫌われている。原因は姉の実の弟であるからだそうだ。面と向かって「うらやましい」と言われて事は数知れず、何回か暗闇の中で襲撃をかけられたりしている。相棒だよな？

「はあ、とりあえず帰ります。疲れました・・・」

「ちよっと、煉！！とりあえず黒子を何とかしてきなさい！！」

「お姉さまあ〜〜！！」と抱きつき続ける黒子

そんなこんなの日常風景

第2話：第一遭遇（前書き）

執筆ペースがぐちゃぐちゃだ
一人称が書きにくい（泣）

第2話：第一遭遇

暑い・・・・・・・・・・

風紀委員といえど学生であり、その本文は学業である。

とは言え、今は待ちに望んだ夏休みがやっと始まったところ。

たまには遊びに行きたい、というのも風紀委員という仕事の性質上あまり暇がないのである。

元々自分の成績は悪くない。いや学園都市でもトップの方に食い込んでいると模試でも証明されている。

そのため、汗くせと学校に通い追試や補習を受けるといったことをせずに時間を有意義に使えるのだ。

ビバ優等生！風紀委員といった時間を拘束されていても、休みを欲しいがために日々の努力が実を結んだ結果なのである。

だがしかし、先日解決した事件の被害総額が目もあてられない程増えてしまったため、只今休日返上で警羅の最中である。

あの事件は自分の仕業では無い。冤罪である。

目撃者もいて、証拠もあったのに……それはまさに魔女裁判。

どんなにNOと言ってもYESとなってしまう。

その上真犯人はゆったりと休暇を満喫しているらしい。

情報源の黒子は「一般人であるお姉さまですから当然ですよ」と擁護することを言っていた。

尚且つ、「事件解決に力を貸していただいたのだから当然ですよ」とのこと。

1に学園都市最強のレベル5が一般人という事に疑問

2に事件解決で無く破壊という大きな間違い

これを黒子に尋ねたところ思いっきり殴られた。理不尽である。更に本人も休暇といって、お姉さまと一緒に過ごすんだとか。

泣く泣く被害者である僕は世の中の不平不満に堪えて頑張るのだった。

まあ、夏休み初日である。学園都市はその性質上、学生は学生寮に泊まっている。

そのためこのような長期休暇は帰省して、あまり学生は残っていないから犯罪件数もあまり増えない上に、ささいなトラブルも少ない。至って平和なのである。

そんな中、休日返上で警羅中の僕。本当に今この場に必要人材なのだろうか？

なんだかアスファルトの照り返し、蜃気楼が見えるほど熱い中で罰ゲーム真っ最中である。

話は一番最初のところへ戻り、

熱い熱い熱い熱いあついあついあついあついあついあつい……

はっ、意識が遠のいていた。脱水症状一歩手前である。

治安を守るべき人間が問題を起こしてどうする、頑張れ御坂煉。

自分で自分を励ましてみるも、遂に周りには人影すら見えなくなっ

た。当然である。こんな暑い日に何故外で一人我慢大会をしなければなら

ないのか？ どうせ人数不足で呼ばれた人材であり、しかも今日は呼ばれてのに

人数すら満足に揃っていない。

さらには警備員の連中ですら揃っていない。治安維持を目的としているが学生である風紀委員ならその気持ちは

わかる。ただ大人ばっかの警備員がサボんなよ！！

本当にサボりたい。

涼しい喫茶店で冷たい飲み物を頼んでのんびりしたい。

脇を見ると喫茶店があった。中は学生でにぎわっている。

その外ではバケツを持った喫茶店の店主が地面に水を撒いている。
打ち水だ。

昔ながらの方法を考えると学園都市という科学も案外あつけないものである。

能力の開発やその能力が物騒なことに使われているのを見ると学園都市の存在理由を見失ってる気がする。

まあ「人間を超えた身体を手にすることで神様の答えにたどりつく」と馬鹿げたことに命を懸けている連中もいるのであながち間違いとも言えないのだが。

能力なんて極力使わない方が安全じゃないかとおおっぴらに叫びたい。

理由は面倒ごとが減るからである。

それ以外の理由なんて無い、存在しない。

姉の超電磁砲も携帯の破損などかなり悩んで特注で作ってもらうか考えていたほどだ。

ちなみにあの人は自分の力を完全に制御できるので壊す理由は自業自得である。

絶対同情なんかしない、むしろ鼻で笑ってやる。

ちなみにこの相談を受けたとき、ついやってしまったら体が痺れて路上に放置された。

さらに見回り中の黒子がこれを見て、思いっきり蹴りを腹に入れられた。

普段なら絶対に吐いていた一撃である。

この時は痛覚も鈍っていたために軽く蹲るくらいで済んだ。

ちなみに馴染みの医者に見せたところ、普通に三日入院を言い渡された。

とある理由でただでさえお金が無いのにさらに搾取されていくので

ある。

もし暇で喫茶店にいても水で何時間も粘っていた。
正直自分でも性質の悪い客である。だからといってやめるわけでもないのだが……。

こんな無駄な思考で今の暑さを忘れながら歩いていき、公園を見つけた。

ちょうど昼時なのでちょっと休憩である。

ちなみに今は11時。

非常に昼時とはいにくい時間帯である。

けっしてさばりじゃないんだ、うんだいじょうぶ、だれもみてないし。

なんかちよつと不安になって思考が退化するといった状況になった。
この暑さでそうとうキテいる。

自分でもそろそろまずいかなあなんか考えているわけで。

でもサボったら明日の休みも取り消されるわけで。

9時から初めて、最終下校時刻の18時がノルマである。

2時間でこれなのに、あと7時間も見回りをしなければならない。

しかも暑さのピークが13時から14時まで……

やっぱ帰ろうかなあと再び思考の影がよぎる。

せっかくの夏休みだし家に帰ってクーラーの効いた部屋で寝よう。

駄目人間の思考であるがすでに決心が固い。

ふと前を見るといかにも服装が怪しい二人組がやってきた。

「ああゝすいません。学生ですか？」

学園都市という馬鹿でかい場所だから、普通見かけないような人もたくさんいる。

タバコを吸ってる外国人の青年？は顔にピアスや刺青、首もとには十字架のネックレスをしており身長も高く髪も赤く長髪だ。

もう一人はTシャツとズボンの片方をごっそり切り落としたポニーテールの女性がいた。

交換留学生なのだろうか？

やけに派手なのだが・・・

青年はめんどくさそうな顔をして「いや、僕らは違うよ。ゲストなんだけどちょっと急いでるんだよ」など言いつつすぐこの場を離れようとする。

逃げようとしていた青年に対してすぐに腕を押さえた。

「くっ、何かよ」「この地域って歩き煙草禁止なんですよ」

一応風紀委員であるから歩き煙草は良くない。こう見えても意外としっかりしているのである。

このしっかりは風紀でなく健康に関してなのがポイントであり副音声である。

「ステイル、一応ここではそれがルールです。従いましょう」

同じく背の高い女性が青年を勇める。こっちは髪も黒く混じりっ気の無い純日本人だ。ただゲストって言う恰好では無く、シャツと短いズボンだけ。この二人を見ると来た目的がまったく分からない。

機密情報の集まりみたいな街にスパイらしくも無く、学者らしくも無い。なんか変だ……

「あの〜ゲストIDの照会だけしたいんですけど」

一応探りだけ入れてみる。

そうすると女性の表情が若干表情が固くなり「申し訳ありません、待ち合わせの時間が近いですので失礼させていただきます」

はぐらかされた。

非常にあわてた様子で説明しているのがちょっとかわいい。

ただ女性の表情が余りにも真剣であったためその後にも何も言えず、ただ見送ってしまった。

いや、単純に仕事が伸びるのがいやになったからなのだが自分に若干の嘘をついた。

見栄を張りたい年頃なのである。

さあ、学生寮に帰って上条さんか土御門さんにアイスか何か奢ってもらおう。

第3話：銀髪幼女

場所は学生寮

自分の家でもあり、最後に残された避暑地でもある。

因みに引き込もっていれば、黒子などの空間移動能力者が来ない限り居留守も使える優れ物。

喫茶店で涼んでいても風紀委員の腕章は注目されて目立つのである。そんな訳で早めに切り上げたパトロールで使った体力を回復するために上条さん家の前にいたりする。

貧乏の先輩でも可愛い後輩のためにアイスなどの冷たいものならおごってくれるだろう。

いやそうに違いない。

正直当てもない自信である。

コンコン

あれっ、反応がない？

留守なのかなあ、とドアノブを回してみると鍵は開いているっぽい。

「それじゃ入りますよ、おじゃまします」

留守かも知れないのに不法侵入をしようとしている僕。

風紀はどうしたっけ？

すると部屋の中で騒ぎ声が聞こえてきた。

「ちょっと待てレン、いや待っててください。まだ入らないで！」

端から見てもテンパっている状況。

そんな切迫した叫び声を聞いても僕はあまり気にしない。

部屋の中はどうせ僕に見せたらマズイ物とかが散乱しているからだと思う。

その位なら理解の範疇である。基本的に僕は耳年増なのだ。
いるんじゃない！よし、アイスをと中を覗くと・・・

「ガシガシっ……、えっ！」

中にはボロボロの布を纏って裸に近い恰好をしている銀髪少女とそれに頭を噛まれている上条先輩がいた。

正直理解の限界を越えてオーバーヒート中

上条先輩が必死になってこっちに語りかけて来るも、まったく頭の中に入って来ない。

その間、銀髪少女は部屋の隅でボロボロ布を纏って蹲っている。

それを見てやっと現状が理解できた。

よし僕は理解力がある。大丈夫だ。

「……上条先輩」

「レン、俺の話を聞いて納得してくれたか」

明らかな安堵

安心して下さい、先輩。僕は先輩を守ってみせます。

「ええ、大丈夫。僕は風紀委員です。取り敢えず警察まで御同行をお願いします」

「犯罪者かよ！違うって。右手で触れたらあいつの服が壊れたんだって！」

「その右手であんないたいけな少女の服を脱がしたんですか？はっ、とんだロリコン野郎ですね！」

いくら風紀委員という立場でも能力で作成した服を纏った能力者など聞いたことがない。

もし其れが本人の能力ならばまた作り直せるはずである。

他人の能力であるなら遠距離で長期間発動出来る程の力を持つことになる。

もしそんなのがいたら速攻でレベル5に認定だ。

今日中に第8位になれるだろう。

そんな訳で有り得ないと考えた結果、Ⅱ上条先輩のロリコン疑惑&婦女暴行疑惑が浮上したのである。

「アイツがこの服は魔術で出来ているから絶対にこの右手で壊れないなんて言ったから試したんだよ」

「最後には魔術ですか？そんなものは昔に魔女狩りで滅びました。どこぞの池袋の都市伝説にでも感化されたんですか？あまりに作り話だとフォローも出来ませんよ」

「いやお前初めからフォローする気無かっただろ！」

因みに少し前の話だが池袋の首なしライダーとかいうのがテレビで放送されていた。

まあ、これはこれで実話だったのだが今は関係無い。

「ねえ、ちょっと良い？」

「なんだインデッ……」

上条先輩が急に言葉に詰まったのを不思議に思っ隅を見ると

「少女って誰の事かな？」

そこには笑顔で人が殺せるような殺気を背負った少女がいた。

だがそんなのに屈する御坂煉では無いんだ。

「あんたの事、今の状態だと痴女ともいう」

「痴っ……滅茶苦茶失礼だよ、きみ！」

一応誤解がないように言っておくと銀髪少女は上条先輩の布団にくるまっている状況である。

微妙にエロイが体型から言ってまったくなんとも思わない。

「そんな小さな身体の奴が少女と言わずになんと……」

ふと思いついてみるとこいつより胸の小さい身近な奴がいたのではないのか？

たしか中学生で同じ学年であったはず

相棒である白井黒子のことだ

たしか姉の話ではAAサイズだったとか

しっかり見るとこの幼女も確かに小さいが黒子ほどではない。

「すみません、君は少女でした」

中学生であのサイズなのだからあれが平均だったら、この少女はすでに大学生くらいである。

「なんか納得がいかなかったけど取り敢えず許すよ、でもね……」

「なんです？」

「人の胸を舐め回すように見るのは失礼だよおお！」

ガジガジッッ！！

思いつきり頭をかじられました。

「取り敢えず上条先輩、アイスを下さい」

「ねえよ！ つーか人を犯罪者よばわりされた奴がその犯罪者からアイスをねだろうとはいいい度胸だな」

「そうじゃ無ければさっきの事で警察に突き出しますよ」

「権力濫用！？ なんつう汚職だよおい」

「出すもん出したら見逃します」

「ずいぶんと安いんだな」

そこで冷蔵庫をいちべつした上条先輩はちよつと考えた様子を見せた後に「そういえば……」

「なんです？」

「昨日さ、お前の姉のビリビリ中学生にあった訳よ」

「あー、逃げ切ったらしいですね。姉さん、相当キレてましたよ」

「あれっ、でもあの後あった時はなんかすっきりしつつも疲れてたぞ」

「上条先輩が逃げ切った後に可哀想な銀行強盗がいて……イケニエにされました」

「……ご愁傷様だな」

「ええ……」

「それでだ、あの後に遭ったら思いっきり雷を落としてきてだな」

「……それでどうしたんですか」

「ピンポイントで家の家電が全部壊れちゃったんだよ」

「はあ……修理代はこっちで持ちます」

「おう、サンキューな！」

「てことはアイスも無いんですか！」

「逆ギレですか！文句ならお前の姉に言えよ」

「姉さんに文句を言っても聞きません！さらに被害が増えます。そして借金も……」

「不幸だな」

「うっ、は……い……、ありがとうございます……」

違うんだ、これは心の汗なんだ。

「じゃレン、駄目になったアイスを買ってきてくれ」

「鬼ですか!？」

「仕方ないだろ、どっかのビリビリのせいで駄目になったんだから」

「せっかく暑い外から戻って来たのに……」

「ほらほら、アイス代位なら出してやるから行った、行った」

ふと手元の財布を見て驚愕する先輩。

「やべえ、全財産59円だけだ」

「でアイス代は？」

「いやいや世の中にはキャッシュカードと言う便利なものも在りますよ」

そうして床の上を真剣に探している先輩。

まあ部屋が汚いのでそう簡単に見付かるわけもなくカード探しは難航していった。

「なんで財布の中に入っていないんですか？」

「多分財布に入れる時になんかあって、ついついポケットに入れた後、家のどっかに投げ捨ててしまったのかと……」

パキッ

上条先輩の足下から何か不安な音が聞こえる。

ゆつくりとその足を退けるとプラスチック製のカード。

キャッシュカードがまっぴたつになって現れた。

「不幸だあゝ」

床に這いつくばるその姿はまさに人生の敗者そのものである。

銀髪はその横でよく意味がわかっていないようだが慰めようと頑張っている。

「先輩……」

「俺はもう寝る、ふて寝する、起こすなよ」

「アイス代を下さい」

「ひどっ！これじゃガリガリ君も買えないし。レン、金を貸してくれ」

「いや俺も金がないんですよ」

学校から奨学金としておこづかいを貰うも病院代、修理代とその殆どが学園都市にペイバックされている。

ただレベル0の上条先輩とレベル3で希少種でもある僕は貰っている金額は天地の差でもあるため多少ならお金が有るのも事実である。

「いやお前、俺よりも貰っているだろ」

そのため当然のようにせがまれるのである。

「仕方ないですね。お金をだしてあげますから買ってきて下さい」

「しょうがない、わかっ…」

突然鳴り出す携帯の着信音

「はいはい上条ですけど」

『上条ちゃんですか、今日は補習がありますよ』

「げっ、マジですか」

『そんなに嫌なんですか、でも上条ちゃん馬鹿なんですから頑張らないと留年ですよ？』

「いや、でも用事が…」

とこっちを見る上条先輩。

申し訳なさそうな表情で一杯である。仕方ないっか…

「アイスも僕が買ってきますから学校に行ってきて下さい」

「すまない、サンキュー、ありがとうございます!」

異常なテンションで喜ばれている。

「じゃ、俺も行ってくるから」

「それじゃ私もそろそろ行くよ」

銀髪がそう言って立ち上がろうとする。

しかしボロボロの服を安全ピンで繋ぎ合わせているのを見ると非常に痛々しい。

「その服で行くんだ」

「うぐっ、……行くもん、シスターだから修道服が基本だもん」

そこに上条先輩が追い討ちをかける。

「まるでアイアンメイデンだな」

「僕的には針ネズミですね」

「あうっ、……ぐすん」

やべっ、泣かせてしまった。

「あー、替わりの服なら俺の部屋にもあるから着ていきますか? 古いのだから棄ててもいい物ですし」

「……………」

滅茶苦茶悩んでいる。

痛々しい恰好だがシスターとして修道服を取るか、普通の人として普通の服を取るか

どっちを選んでも苦渋の選択だろう。

「……………それじゃ貸してくれるかな?」

「ぐっ!」

上目使いでしかも涙目にちよっと心が揺れた。

俺はロリコンじゃないんだー

魂の叫びである。

「わかった、すぐ持って来ますからちよっと待っていてください」

「あのですね、ちょっとばかり近隣トラブルに巻き込まれて遅れそうなのですけども『上条ちゃん』は補習の意味がわかっていてのですか?』すみません」

「持ってきたよ」

「ありがとう」

いそいそとその服を着替えようとしている銀髪。

ずっと部屋を出る僕とさっきの先生に少し遅れることを説明している上条先輩。

そして直ぐに動きがとまる。

「いつまでそこに居るのかな」

「すみませんでしたー!!」

何故かちやつかり部屋をでている僕と横で汗をかいている先輩。

「ロリコン」

「違いますから、そんな冷たい目をしないでくれますか?!」

「入ってもいいよ」

銀髪から声がかかる。着替え終わったらしい。

入ってみるとそこには……

「うーん、もうシスターっていうより外国の少年だな」

しょうがない、昔の服とはいえ男の服では誰が着てもそう見えてしまう。

「まあ仕方ないですよ。それにほら違和感無いですし」
ほら体格的にも……

「やっぱり君からは失礼な気がするよ」

ジト目で睨んでくる銀髪、なかなか勘が鋭い。

ふと肝心なことを思い出す。

「そういえば、まだ名前を聞いて無かったですよね?」

銀髪は辺りを見回し、そして小首をかしげながら自分に指差す。

「私のこと?」

せっかく勘が鋭いと評価したのにそういうところは鈍い。

勘が鋭いというより敵意を感じやすいということだろうか。
とりあえず話を進めるためにうなずいておく。

「わたしの名前はインデックスっていうんだよ」
インデックス？

辞書の目次って意味だろうか？

謎だ、謎過ぎる。誰かに知られたらまずいのだろうか。

もしかして大富豪の娘とか！！

ありえないな……、そうならばあんな格好をしているはずが無い。

「はあ、とりあえず本名をお願いします」

「だからインデックスだよ！！」

なんか嫌われたらしい。

あれか、さっき会った二人組みたく知られてまずい人とか。

そういえば、あの二人組見逃してしまったんだったよね、まずくね？
自分のしでかした事を思い返しちよつと鬱に為った。

「イギリス清教から来ました」

「イギリス清教って？」

「魔術結社だよ」

やばい、ついに意味のわかんないのが来た。

あれですか、超能力、化け物と続いて魔術ですか？

「上条先輩……こんないたいけな子供を魔術とかいうもので騙すなんて最低です！！」

「だあ、かあ、らあ、ちげえー……って言ってんだろぅが
！！！！！！」

拳骨を振り落とされました。

少しやりすぎたらしい、反省である。

「で？」

「禁書目録だから私の中の10万3000冊の魔術書が狙いだと思
われる奴等から襲われていたんだよ」

「なんか隣のビルから飛び移ろうとしたところを銃で撃たれてそこ
のベランダに干されたらしいぞ」

と自分の家のベランダを指差す先輩。

「――少し待ってくださいね」

10万3000冊の魔術書？

「魔術書って黒い雌鳥、ソロモンの書、レメゲトンとかか？」

「そうだね、後の有名所だとエイボンの書とかかな」

あれ、インデックスはノリノリで聞いてくれるけど上条先輩の目が胡散臭そうな顔をしている。

ああ、こいつもカルト宗教の一員なんだと、

「いや常識じゃないですか？」

「いや世界にそんな常識があったら怖いっつーの」

「それらをね、全部抱えているから狙われているんだよ」

インデックスを見てみると明らかに手ぶらである。

あえて持っているといえば、さっきまで持っていたボロ布のみ。矛盾である。

「抱えているってどこに？」

「ここ」と、自分の頭を指している。

「……ってことは！」

「おい、信じるのかよ」

上条先輩がこっちを見るも余り余裕が無い。

「やばい、かなりまずいかも……」

「「?」?」

二人とも現状がわかってないらしい。

「一応聞いときますけど、インデックスはゲストIDを持っているんですか？」

小さな頭を倒して小首をかしげる。

「ゲストID？」

なんだ、その飯屋の社員パスみたいなもの
どうもIDのことを知らないらしい。

「はあ、持っていないなら申請しないとこの街にはいられないんですけど……」

家に帰ったら帰ったで余計な爆弾を背負ってしまったらしい。

「……、いいよ別に。すぐに教会に行って保護してもらうもん。これ以上迷惑を君たちにかけたくないしね」

「別にそこまで迷惑じゃないけどな」

と樂觀的に考える上条先輩。

だが、そんなに簡単なことじゃない。

「とりあえず魔術の有る無しにせよ、この子は本当に危険です」

あまり理解して無いらしい。この子が抱えている爆弾の重さを

「もし魔術書が本当なら狂信者が攻めてきてもおかしくありません。それぐらい貴重な物なんです」

「でも、でも、本当に迷惑がかかるよ」

「それでも…はい、もしもし」

悪いタイミングで電話がかかってきた。

『もしもし煉君ですか？』

「そうですけどまさか事件ですか？」

『君の管轄地区にこの間の強盗犯の残党が事件を起こしたのよ』

「わかりました、すぐに向かいます」

不運もいいところである。

「すみません、僕も用事が出来ました」

「おいレン、こいつどうするんだよ」

「しばらく先輩が面倒見ていてください」

「だから、私が出て行ってくて」

どうも意思が固いらしい。

多分、言っても聞かないであろうインデックスにあるものを渡す。

「これは？」

「これの短縮の3にかけると僕のに繋がりますから、いざとなったらかけてください。」

文明の利器、携帯電話である。

一応プライベート用と仕事用で二つ持っていて、プライベート用を渡しておく。

「ちょ、あの」

「それでは失礼します」

インデックスが何か言いたそうだったが時間が無いから無視する。

「それじゃ、オレも行ってくる!!」

「鍵は開けっ放しでいいからなあ——」と一番後に出るであろうインデックスに大声で伝えていた。

そういえば先輩は補習の時間に合うのか？

第4話…借体電波

「最悪です」

インデックスを置いてきた事もそうだが、あの時に銀行強盗を全員捕まえたと思った自分に自己嫌悪も抱いている。

あの子の取り調べでは銀行強盗が実は4人組で有ることがわかった。風紀委員である自分達が着く前に彼等が逃げていられたのかよく考えるべきだった。

実行犯が3人だけだなんか有り得ない。脱出のための人員も考慮に入ればこんな事態にはならなかったものを……
追跡班の灯里先輩から連絡が入る。

『そこを左に曲がった所にいるはずです』

「――了解しました」

深く考えている時間は無い。

逃してしまったのなら次は捕らえるまでである。

しかし、実行犯の中ではあのレベル3が一番戦闘タイプではなかったのだろうか？

――僅かな疑問

おそらく相手は補助タイプの能力であり、絡め手を使用してくるであろうと予測する。

対処法としては相手の視認と最速で間合いを詰めてからの近接戦で片を付ける！

自分の中で今後の行動が生まれた所でさっさと終らせる。

正直に言うならこっちの問題よりもインデックスの問題の方がより重大である。

急がなくちゃ……

『その赤い服を着た女です』

「確認しました……って逃げられましたっ?！」

どうも気付かれたらしい。

当然と言えば当然か。

常に風紀委員の腕章をしていなければ犯人逮捕にも能力が使えない。ただ周りに注意を呼びかけるために必要な事であるらしいのだが追跡にはまったく向いていない。

どうも大学生位の女の人で足がやけに速い。

やばい、どんどん差がつけられている。

あんまり使いたく無いけど、使うか。

「縮め！」

空間よ、湾曲して縮め！

最大距離20メートルを一步で届く距離にする。

幸い人は少ないものの、このままだと商店街に入って人が多くなる。そうなると空間湾曲内でのエネルギー保有量が簡単に限界を超えて使用出来ない。

捕り逃がす可能性が出てきてしまう。

「はあはあ、縮めっ！」

更に20メートル縮める。

しかしながら何時やっても実に疲れる能力である。

燃費が悪すぎ

20メートル縮めるのに40メートル全力疾走する位の体力を使う。

およそ倍だ

出来ることなら使いたくない能力である。

能力を使用した甲斐があつてか、やっと追い付いてきた。

後一回位の使用で追い付ける。

空間よ、湾曲して縮め！

「縮め！」

目の前には20メートル縮められた先の空間。

捕まえた、そう思ったとき急に犯人が振り返ってたのである。

表情には焦りの中に、しかし口元には笑みが…

っ！え？なんだ今の？

急に背中に衝撃が走った。

走りながら後ろを振り向くと、スーツ姿の一般人がいるだけである。共犯という訳ではないらしい。

前に走る女の人は携帯電話を掛けながら走っている。

しかしながら予想ではこの女の人は補助タイプの能力であつたはず。電話は共犯者への連絡だろうか？

しかしながら銀行強盗は取り調べでは4人組であつたはず。

この1日で新しく仲間を手にいれたのは考えにくい。

それではこの衝撃はあの人の物であろうか？

しかし補助タイプの能力であるはず。

思考のループである。

が、能力キャンセルされてしまった上に衝撃の影響で縮んだ距離がまた伸びてしまった。

しかももう商店街に入ってしまった。

通行人が増える場所に逃げられてしまうという失態、通行人を巻き込むと減点対象である。

「すみません、道を開けてください！」

大声で注意を呼びかけると通行人は蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

何故だ？

確かに注意してそれを実行してくれる事は好ましいが、逃げる時に目の色にこっちに対しての怯えが混じっていたぞ。

僕は破壊神かつ！

くっ、一度ここも探って洗い直しておくか。

なんか今の追跡任務より面倒なことを背負いこんだ気がしてならない。

そんな事より追跡である。

一応、好意的では無いにしろ道が開いたのだから追跡はしやすい。若干ひらいて40メートル程の距離が出来ている。

能力使用で2回分であり数秒で追いつく距離である。

だがしかし、相手の能力がいまいち理解出来ない。

あと1回受けてみればおそらく解るだろうが、その1回を発動させるために距離を縮めなくてはならない。

結果、疲れる上にダメージも受けるのである。

しかしながらそうしないと近づくことすら困難である。

こういう時に相手の黒子がないという現状に悪態をつきたくなる。まあ、居たら事件解決までの時間はかからないものの、口煩くこっちの言動を注意したり、姉が物を壊したりと不幸なことになるのだ
が……

「はぁー、……縮め」

想像によりとことんまで堕ちたモチベーションにやる気のない声が加わり、普段と変わらない能力が使われる。

一応、これで先程と同じ20メートルという距離。

相手がまた後ろを向いてきた。

その手にはやはり携帯電話が握られている。

なんかしらの衝撃がやって来る筈である。

ゴンッ！バコッ！

「痛ってえ〜」

最悪だ、不幸だ。

また背中かと思ったら右から側頭部にガツンと衝撃が来た。

その上走っている最中だから思いっきりコケて額をアスファルトに打ち付けた。

後者のほうが倍以上に痛い。

しかも目の前がボヤけて見える。

余りにも予想外の痛みについ外間も忘れて大声をあげてしまった。横には顔馴染みの魚屋のおじさんが携帯を手にとって大丈夫か、と声をかけてくれる。

「有難うございます」

「おう、無事そうで何よりだ」

視界がはっきりとしてきて辺りを見てみると人氣がまったく無い。どうも犯人には逃げられたらしい。失態である。

「ところでその辺に怪しい人影、ありませんでしたか？」

「いや、怪しい奴らはお前さんが来たときに全員逃げていったからな……見てねえぞ」

やっぱあいつ等怪しいのかよ！

結局増えた仕事にげんなりする。

おじさんにお礼を言ってその場を離れることに。

しかしながら衝撃の原因が犯人の協力者という線が薄くなった。何かを利用して能力を発動するタイプらしいと考えると……

……

………！！

わかった。

ならば対処も自然と思いつくし犯人の切札も理解できた。

確かに風紀委員ならばほぼ防御不可能の攻撃である。

一先ず灯里先輩に電話である。

「すみません、逃がしました」

『わかっています。犯人ですがその道を右に曲がって公園の方に行きましたよ』

「わかりました。それにしても相変わらず凄いですね」

『うん、何が？』

「いや、灯里先輩の追跡電波ですよ。相手の電話番号をわかってればそこから直ぐに逆探知できるって凄いですって！」

『いやいや、黒子ちゃんのようなレポート能力の方が追跡や捕獲には役立つでしょ。良い相方がいるじゃない』

「でもあそこまで精神状態に作用されるのも珍しいですよ。基本的に肝心な時には使い物になりませんし」

『空間系は使うのに苦労するからしょうがないわよ。取り敢えずこの事は内緒にしておくわね』

「助かります」

いや本当に気の利く先輩である。

同じ風紀委員でも黒子とは大違いだ。気の利く良い先輩である。

そんなこんなを考えている内に公園にたどり着く。

そこには走り疲れましたという位、荒い息をしてスピーカーの付いた街灯に寄りかかっている犯人がいた。

体力の無い犯人である。

「あっ：あんたねえ、しつこいわよ！」

「うるさい、めっちゃめっちゃ疲れただろ！こっちは部屋で涼んでいたのに、もう汗だくだぞ！」

本当に失礼だ！

人をストーカー呼ばわりなんかして。

でもこれでチェックメイト。

疲れたけどまだ息は大丈夫。

まだ動ける。

そう思っていたら犯人は携帯電話を取り出してそれを持ちながら両手を上げる。

降参の意味だろうか？

「もう逃げる気は無いわ。でも、これであたしの勝ち」

急に空気が変わる。

さっきまではずっと追跡だったから、お互いに戦う意思は存在しなかった。

日常から戦闘へ

その一つが公園という憩いの場を広い闘技場へと作り替える。

幸いなことに人は全て出払っているらしい。

これも恐らく灯里先輩のおかげであろう。

犯人が何処に逃げるか予測して、あらかじめ人払いをしておく。

自分では謙遜していたが灯里先輩のような人がいないと、この仕事は上手く回らないのである。

そんなことを考えていただろうか……

「ちよっと、あんたやる気あるの!？」

どうもやる気がないように見えたらしい。

というより、そう思っているなら逃げろよ。

少し馬鹿にされた気分だ。

「心配しなくても大丈夫ですよ。殺る気は充分ありますから」

……あれ、こんなに笑顔で言ったのに、かなり相手の腰がひけている。

普通に言ったよな？

相手は今の言葉の意味を深く考えないように頭を激しく振っている。攻撃のチャンスだろうか？

「とっ、取り敢えずこの場所なら、わたしの負けは無いわ!」

さっきは勝てると言ったのに、今度は負けないと言う。

「自信がないなら投降してもいいですよ」

気軽に声をかけて、徐々に失いつつある自信をさらに削り取ろうとしてみる。

「うるさいっ! いいわね、いくわよ」

顔を真っ赤にしながら言っても説得力が無いのに。

どうやらこの人、あまり悪いことには向いていないようだ。

すると相手は携帯を口に当てて喋り出す。

「縮め!」

相手に向かって思いっきり――右側へと跳んだ。

後から自分が立っていた地面に衝撃が走る。

攻撃方法がわかっているなら避けるのは容易い。

今までかわせなかったのは、発生場所と発生時間がわからなかったからだ。

「なんでかわせるのよ!？」

「タネ明かしでもして欲しいんですか？確かに珍しい能力ですが、タネが分かれば別に怖くありません」

彼女の能力…、それは自身の携帯の電波を他者に強制的に繋げるもの。其れを拡大化して指向性を持たせたものだ。
言うならば……

「能力名、レンタルフォン借体電波といったところでしょうか？」

「ぐっ、よくわかったわね！でもこの公園なら気づいても避けられないわよ」

かなり強気らしい。

一応、追い込まれているくらいの焦りとか見せて貰いたいものなのだが……

でも、まっ、いいか

「先輩お願いします」

『わかったわよ』

カチ、カチ、カチ、カッ——

「えっ！何此れ？」

公園の時計が止まる。

「公園のスピーカーを使った死角無しの攻撃も電気がおちたら意味がなかったね」

状況を察して素早く逃げようとするが、この近距離ならもう逃がしようがない。

——任務終了

さて……と、捕獲したことを先輩に伝えて『ヤダ！なに、なんなの！』、様子がおかしい……

パタッ

ちょっと待て、犯人が捕獲と同時に倒れるってどういうことだ？
なんか自分の頑張りを全否定された感じとさらなるトラブルの予感が……

第4話：借体電波（後書き）

また更新が長引くかも……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7306d/>

とある弟の奔走日記

2010年10月8日14時33分発行